

# 心理療法の中での夢の持つ意味

— 転機を暗示する夢の紹介 —

塩山 二郎

## The Meanings of the Dream in Psychotherapy — The Introduction of the Dream that Imply a Turning Point —

Jiro SHIOYAMA

【要旨】心理面接を継続している中で報告される夢には、さまざまな意味があるが、面接の流れの中でクライアントにとってとても重要な意味のある夢であることがある。本稿では、筆者の経験した継続面接の中で、クライアントの転機を暗示する夢をいくつか経験したので報告するしだいである。夢がこんなにも鮮やかに人に影響を与えるものであるかということを知らされる結果になった。

### はじめに

フロイト・Sが自由連想を考案して以来、精神分析や心理療法を受けるクライアントは、その面接の中で、自分の見た夢を面接者に話すことはよく知られていることである。それは、夢も自分の内的な体験と考えるからであろう。夢は、無意識からのメッセージであるとフロイトは言う。そして、彼は有名なドラの症例で、ドラの語った夢について可能な限りの解釈を施している。語られた夢の持つ意味を徹底して考えたのである。このフロイトの鋭い洞察以来、多くの研究者がさまざまな角度から同じような研究を重ねているが、筆者も、筆者の面接経験の中で報告された夢の持つ意味について考えてみたい。

### 面接の中での筆者の夢の利用法

人は、1日のうちに3～4つの夢を見ているといわれているが、記憶に残る夢というのは、さほど多くはない。多くても1～2つである。人偏に夢と書いて儂いと読むように、夢というのは儂く消えていくものである。だから夢に左右されることなく、気楽に生きられると言えるかもしれない。また、夢が自分の記憶に残る、残らないということにも意味があり、それこそ、われわれはそのあたりを無意識のうちにうまくコント

ロールしていると考えられるのではないだろうか。われわれ心理臨床家の仕事は、その無意識という意識をいかに意識化して、日常の思考、行動を楽にするかという働きを持っている。

筆者は、現在、大学に所属しているのだが、およそ2年前までは、30数年間、総合病院の神経科に所属していた。そこでは、個人面接か家族面接が中心であった。来談するクライアントは、軽度の神経症から、境界例人格障害、重度の統合失調症まで、さまざまな人であった。

このような状況の中で、夢を用いた面接は、① 自ら来院してはいるが、寡黙で、言葉による表現力が乏しく、また、対人緊張が強い人で、直接的なコミュニケーションが困難な人であるか、② 夢に関心があり、夢を題材にした面接の方が望ましい場合、③ 直接の対話中心だが、その中でときどき夢が語られる場合の3つに分けられる。

第1群の人の場合は、箱庭、カラーージュ、その他の介入手段を用いてもいいのだが、寡黙な人の心の内面は、外に表現されないだけに、さまざまな観念内容が蓄積されていると考えられ、もし、夢が利用できれば、それに越したことはないと思うのである。

第2群の人は、自分自身に関心が強く、それこそ夢

日記をつけようかというほどの熱心さで、自己探求をする人たちである。

そして第3群の人は、たまに見た夢で記憶に残っているものを面接に持ってくるものである。以上のいずれの場合でも、チャンスがあれば、夢を自己理解の方法として利用しないほうはないと考えるのである。

面接の中での夢の報告の仕方は、人それぞれで、便箋に夢を記録してきて、それを手渡しする人、記憶していて、口頭でしゃべる人、ノートに記録していてそれをしゃべる人などであった。どの場合も筆者は、面接の中で、それを読んでもらい、記録を取りながら夢を聞く、という作業をしてきた。語られた夢については、目が覚めたときの印象、その夢から連想されることなどを聞き、記録にとどめるという方法をとった。また、報告される夢が数多くなる場合は、1回の面接では、3つまで聞くことにしてきた。これは、筆者の抱えて立つ考えが、どちらかというところと精神分析的心理療法というもので、クライアントの現実の生活の中での対人関係を中心に進める方がよりよいと考えるからである。いうならば、現実から目をそらさない方向を考えてのことである。

さて、以上のような考え方から、面接の中で夢を使用してきたのだが、報告された夢が、クライアントにとって重要な、それこそ近未来に転機が訪れることを暗示するような夢という経験をしてきたので、ここでは、そのいくつかを提示し、考察を加えたい。

## 事例紹介

### 事例1

- 1) クライアント：Aさん、面接開始当時：33才男性
- 2) 来院経路および主訴：知人の紹介で、来院、初診を経て心理療法へ。主訴は、引きこもり、人との関係がもてない。お尻に汗をかくので、たびたびトイレに行かねばならない。また、立って小便が出来ないなどであった。
- 3) 面接経過：15歳ころより、不登校になり、ほとんど外に出なくなった。たまに見相センターなど、子どもの相談機関に通う程度だった。後は、家でぶらぶらする生活であった。

33才のとき筆者のところに来訪し、心理療法開始となる。1/2Wの面接を開始する。瘦身で、おとなしく、無口で、ソファーに座ると、長身の人の両膝だけが突出して見える姿が印象的であった。

面接を始めても、ほとんどしゃべらず、はいとい

いえで応答するような面接が続いたので、筆者は、夢の導入を提案し、彼は、快く応じた。

面接の回が進むごとに関係もでき、少しずつ内面を話すようになってきていたが、その中には、隣のおばさんが、うちを監視しているといった関係念慮も語られ、夢でも、タレントや、有名人が登場するといった自我の脆弱さが気になることもあった。クライアントは親の離婚により、早くから父親とのかわりがなく、家庭では気弱でおとなしい母親と祖母に育てられ、男性といえば3才下の弟との接触がある程度なので、クライアントの中核的問題は、男性性の獲得にあるという印象を持つにいたった。言うまでもないが、立って小便が出来ないという訴えも、明らかに男性性の問題であると考えられた。

### 4) 転機となったと思われる夢 (75回目の面接、92回目の夢) 「蛇と格闘してやっつける夢」

「私はコンサートを聞きに来ています。ピアニストがすばらしく早い指のタッチで演奏しています。それを一番前の席で見っていました。休憩になり、トイレに行きたくなり、トイレに行きます。そこは、人が多く、並んでいました。自分の番が来たと思ったら、他の人がすっと入り、先を越されてしまいます。私は我慢できなくなって、女性のトイレに入り、用を足します。

(場面変わって) 家に帰ったら、祖母が、蛇がたくさんいるので全部やっつけて、と言う。

私は、必死になり、鎌とかいろんな道具を使ってやっつけます。ゴム靴を履いて踏んづけたりして、やっとやっつけたと思ったところに、中学時代の友人が赤いスポーツカーに乗ってやってきました。彼はうちの家の周りをぐるぐる走り回っていました。」

〈印象 すごく緊張し、蛇をやっつけることに必死になりました。〉

〈中学生の同級生は元国鉄の人で、仕事中に片足の膝から下を切断した人です。〉

### この夢の理解

この夢を聞いて、筆者がとっさに思ったのは、おっ！という驚きと賞讃の思いだった。やっど彼は、最大の課題である男性の象徴ともいえる蛇をやっつけたのだという思いであった。

最初の音楽会の場面は、ピアニストが面接者で、クライアントは、一番前の席で聞いている人である。つまり、この場面は、面接中のクライアントと面接者を表し、夢の記録を必死で書いている面接者を表現して

いるものと考えられる。そこには、クライアントの面接者に対する陽性転移がこめられ、どこかエネルギーを蓄えつつあるクライアントの姿を見ることができ。そして、彼はトイレに行くが、妨害されて、仕方なく女性用のトイレで用を足す。これは、普段の彼である。そこで場面が変わり、最大の課題の蛇をやっつけるという作業に取りかかる。悪戦苦闘した末に、蛇をやっつけ、ホッとしたところに、陽気で元気な中学時代の友人がやってくる。この友人は彼の分身である。仕事中に片足切断の事故にあった友人とは、まさに、立って小便のできなくなっていた彼を表している。そして、その彼が、赤いスポーツカーに乗って、家の周りを走り回るほどに、浮かれているのである。まさに、自分の課題であった男性としてのたくましさ、雄々しさを勝ち得た喜びが表現されていると言える。

#### その後のクライアントの変化

面接が進んでも、クライアントの寡黙な態度はさほど変わらなかったが、しばらくして、立って小便ができるようになったとクライアントは面接者に告げた。その顔は、表情乏しくはあるが、抑えた表現の中に多大の喜びがこめられているのを感じ取ることができた。さらに、この夢の報告を受けて3～4ヶ月経過して、クライアントは、アルバイトを探し、1日6時間の対人接触の極力少ない仕事を見つけ、初めて働き始めたのだった。

その後は、面接の経過とともに、だんだんと人との接触のもてる仕事へと替わり、アルバイトから常勤の職に替わることができた。

#### 事例2

- 1) クライアント：Bさん、面接開始当時：14才男性。中学3年生。中肉中背で、丸顔、まだあどけなさが残っていて、気弱そうな表情の子。
- 2) 来談経路および主訴：クライアントの中学教師からの紹介。主訴は、不登校。中学3年の9月頃からちよくちよく休み始め、同年11月から完全不登校。
- 3) 面接経過：最初は、週1、1年4ヶ月以降は週2回の面接。これは、本人の意欲が湧いたのと、ピッチを挙げないと長期化することが予想されたため。初期には、おとなしくて、寡黙で表情に乏しく、自分の正体がつかめないとでも言うような不安な様子が伺えた。学校に行かなくなると、何をしていたのかかわらず、ただ、呆然と生活する毎日であった。それでも、面接を始めると、欠かさず毎回遅刻もな

くやってくる人であった。はじめは、死にたいという思いが湧いてくる、家ですることもないと嘆いていたが、週1回は図書館に行き、小説を読み始める。次第にその世界に浸れるようになり、少しずつ読書量を増していき、長編小説まで読めるようになっていった。

彼の問題は、幼稚園時代から英語、体操、公文と習い事を始め、小学校の低学年からは学習塾通いに励み、中学受験を何とかクリアしてきたところにある。クライアントは、エリート街道を突っ走る父親や、家系的にエリートであるが、そのエリートということに自らはコンプレックスを抱いている母親の下で、その両親の期待に応えるための受験勉強に精を出してきたのであった。学校では、教師からも期待がかけられ、学級委員になると、不登校気味の生徒の面倒まで見るような生徒だった。それが、中学3年になって学校にも、親の期待にも応えられず、息切れがしてしまったのである。激しく飛び続けた渡り鳥が、もう羽を休めたいと叫んでいるかのように筆者の目には映り、そっとしておいてやりたいという思いがこころに湧いていたのである。

夢は、初期の頃からノートに記録して持ってきて、毎回1つは報告していた。夢の報告では、はじめは、1、2行くらいの短い夢だったが、面接の中で、自分の話ができてくる毎に夢の内容も豊かになっていき、その量も増えた。この変化もそばで見えていても印象に残るおもしろい現象であった。つまり、自分自身に関心が向くごとに、夢の内容も、その分量も少しずつ増えていくのである。何とも見事な心の変化であろうと感心することが多かった。

- 4) 転機となったと思われる夢(170回目の面接、230個目の夢、「母親の子を妊娠する夢」)

「ある日、体調が悪かったので、病院へ行って、ずっと尿の調子が悪いというと、医師が診断して、妊娠しているといわれた。僕は、絶句した。死にたいと思った。それから後で、整形外科の医師がわざわざやってきて、別に死ぬわけじゃないと言った後、診察のカルテを見た。そしたら、その医師はこれ、間違っているね、君は更に妊娠していると言った。僕はもう、絶対死にたいと思った。医師に、何かあったのと聞かれて、全く身に覚えが無いと僕は言った。」

くただ、死にたい。あなたは死になさいといわれているように思った。マザコンが関係していると

思う。今まで見た夢で1番ショックだった。母親と重なった感じ。自分は母親の子を妊娠したと思った。何かあったの？という問いは、母親との性的関係のことだった。)

〈妊娠するわけは無いのに、真に迫っていたので、しんどかった。母親と性的関係になったのではないかという思いを持ったのがしんどかった。最近思ったけど、僕は、マザコンだと思う。母親の機嫌を気にする自分がいることにぞっとした。あなたたちがいないと生きていけないわという感じの圧力を感じる。今のままではあの世でも安心して暮らせない。〉

234個目の夢「急に母親が風呂にはいってきて僕の身体を洗う夢」

「風呂に入っていたら、いきなり母親が入ってきて、僕の身体を洗い始めた。僕は、顔をそむけて、何分か我慢していたら、急に怒りが込み上げてきた。」

〈死の次の屈辱〉

#### 夢の理解

230回目の妊娠する夢を見たクライアントはびっくり仰天している。それもそのはず、高校生の男子が妊娠しているという夢であり、しかも、母親の子を妊娠しているという二重ショックの夢である。クライアントは、ただ死にたいと夢から目覚めたときのことを語っている。彼のこれまで報告された夢の中で、これほど彼にとって衝撃的な夢は初めてである。思春期にあるクライアントの夢ではあるが、これは、性的な夢ではないと考えられる。むしろ、これほどまでに母親から荷物をおっかぶせられた苦しみと取るべきではないだろうか。

調子が悪くて、病院に行くわけだが、どうしてこんな不登校になったか、自分でも訳が判らない状態にあるクライアントである。その辛さが、この夢となって表れたと考えられる。「君はさらに妊娠している」と言われるあたりは、一重の重さではなく、二重の重荷を背負っていると言っていることになる。それは、母親の期待という荷物だけでなく、父親の期待もそこにこめられていると考えられる。如何に、親の期待に押しつぶされてきたかがよく分かる夢と筆者には理解された。そして、この夢からどれくらい経ったら、クライアントはこの事実をどのように言語化できるのかという楽しみが増した。

234回目の、母親が風呂場に来て自分の身体を洗う夢は、前の夢より、4個後に報告された夢である。こ

の夢は、いささか性的なおおいがする。エディプス葛藤をもう一度吟味しなければならない最中にあるクライアントの性的葛藤がこの夢には忍び込んでいる。しかし、ここで強調したいことは、初めてクライアントの怒りが表現されていることである。身体を洗いにくる母親に、日常生活では、これまでされるがままになっていた自分があるので、ことばでは表現しにくいけれどももう我慢ができないといった怒りがこの夢にはこめられていると思われるのである。

そして、この2つの夢から、クライアントは自分の無意識からのメッセージを確実に汲み取ることができるだろうと筆者は確信のような思いを抱いたのである。

図らずも、やや遅かったが、この2つの夢から6ヵ月後に、クライアントは、「自分の不登校は、両親に対する反抗だった」と語った。まさしくその通りと考えられるのである。夢の持つメッセージの大きさと見事さに脱帽するばかりであった。

#### 事例3

1) クライアント：Cさん、面接開始当時：20才女性、大学生。

ほっそりして、中背。とにかく、表情が硬く、身体の動かし方からしても硬く、うつむき加減で、出会っても相手の顔を見なく、当然目もあわすことはない人。

2) 来談経路および主訴：大学の学生相談の担当者からの紹介。主訴は、人前でものが言えない、寡黙、しかししゃべりたいとは思わない、人が怖いといったものだが、怖いという訴えの中には、それを何とかしたいという思いがこめられているから怖いと感じるのであるか？というかすかな問題解決の方向性を見出せる程度の訴えであった。クライアントのしゃべれる範囲は、母親と、同居している姉の2人くらいである。父親とは一切口を利かない状況であった。紹介主の大学の先生も、ほとんど困り果てたのでといって、紹介されてきたくらい、ものを言わない人であった。

3) 面接経過：初回面接から2年までは、2週に1回の面接であった。面接時間、50分の7割は沈黙が続いた。それは双方にとっても疲れる面接であった。夢の報告はごく初期から始まっていたが、夢を入れても、その報告が済むと、もう沈黙の連続であった。なぜそんなに沈黙が続くのかということすら理解できず、面接の必要性についての話し合いもた

びたびであった。それでも、次第にそこらは暗黙の了解の下で、淡々とした面接は継続された。

語られる夢は、数行の簡単なものだったが、そういう短い夢からでも、クライアントの心うちを表してくれるものが散見され、だんだんと心を開いていくクライアントの姿を捉えることができた。

たとえば、58回目の面接、192個目の夢では、「ハムスターを飼っていました。そのハムスターを見て、この子にも嫌な思いをさせているのかなと思いました。」という報告がある。クライアントは、一時期ハムスターを飼っていたことがある。そのハムスターが出てきたのだらう。まさに、ハムスターはクライアントの分身であり、日ごろの生活の中で、自分がいつも嫌な思いをしていることを投影する夢と推察される。

また、同じその頃の夢で、「家の中のどこにいても誰か後ろに立っていて、私の首を絞めようとする感じがして怖かった。」という恐怖感の強い夢も報告された。定型夢として「寝ようとして窓の鍵をかけようとするが、どうしてもかからない」とか、「窓の鍵をかけて寝たけど、起きて確かめに行くと、かかっていませんでした」という夢を何度も報告している。自分の気がつかないところでの侵入恐怖が強く存在していることが分かる。

8日目、100回を過ぎた頃から、クライアントは、職場の中年の女性から挨拶をされ、返事ができるようになり、その人とだったらしゃべってもいいと思うようになる。それまでは、かたくなに誰としゃべるのも拒み続けていたのである。また、家でも、親戚の叔母さんの電話に出て、かなり普通にしゃべっていたねと姉から指摘されるようになる。少し変わったといわれるようになった。

#### 4) 転機となったと思われる夢 (124回目238個目の夢)「宇宙人と戦う夢」

「朝起きると、テレビのニュースで、日本各地でユーホーらしきものが現れたとっていたことを母が話してくれた。窓から外を見ると、何か光るものがすごい速さで、行ったり来たりして突然爆発しました。煙の中から大きな金属製の傘が見えました。それは、近くの公園に着地しました。少し経って一階の窓の外に、銃を持った人影が見えました。人の形に見えても、中身は昆虫のような宇宙人という気がしました。宇宙人は家の中に入って来たので、私は、母と姉と一緒に二階から逃げようと思いました。

私は窓から逃げようとしたけれど、母と姉は宇宙人をやっつけるといったので、3人で、傘を持って宇宙人をたたいて倒しました。外は少しずつ騒ぎが大きくなっているようで、電話も通じなくて、助けは期待できそうにもありませんでした。」

くこの宇宙人がゆっくりした動作で何もいわずに動くので、周りから見たら私もこういう得体の知れないものに見えるのかと思いました。>

く(Th.: そう思ったとき、どう感じましたか?) 得体の知れないものには怖いという思いがあるだろうから、排除したくなるのも当然と思う。(Th.: あなたは周りの人から避けられてきたという思いがありますか。)

… [しばらく沈黙して] …あります。

(Th.: どんな思いがありますか?)

ただ避けられるのは、それはそれでよかったけど、嫌がらせをされたり、うっとうしがられたりするのはいやでした。たとえば、膚の色、髪の色、歩き方などについて、いろいろしゃべられていた。成績表を配っているとき、みんなは、成績表を人に見られないように隠すように持っていたけど、私は、ほんやり隠さずにもって席に着くと、自信があるから隠さないんだと囁かれていた。まったく私の思いとは関係ないのに。>

#### 夢の理解

夢の感想にあるように、この夢は、敵対する宇宙人が、実は、クライアント自身である。いうならば、自分がこれまで宇宙人のように周りの人とかけ離れた存在であったことを認める夢である。とくに、自分自身のことを、「得体の知れないものには怖いという思いがあるだろうから」と言い、「排除したくなるのも当然と思う」と自らの不自然さに気づくコメントをしている。

夢に登場する人物は、宇宙人を除けば、母、姉、自分である。何の心配もなく、気楽に話せる日常の仲間となっている人たちと、一歩外に出ると宇宙人になってしまうもう1人の自分が表現されている。これほど、彼女の存在をうまくあらわしているものはないといえる。そのことに夢を見たすぐ後に気づいている。見事と言うほかはない。宇宙人をやっつけるとは何を意味しているのだろうか。宇宙人が宇宙人であることをやめる、そう宣言しているようなものであろう。まさに、クライアントにとっては、エポックメイキングな、重要な意味のある夢と言える。

事例 4

1) クライアント：Dさん、面接開始当時：29才女性。

目のクリッとした、あとけなさの残る、中肉中背の人。

2) 来院経路および主訴：遠隔地の心理療法士より紹介。会社を休職して来院。面接間隔は、はじめの5年は、週1、それ以降は、2週に1回となる。

主訴は、職場の仲間にハネにされ、ショックで立ち直れないというもので、うつ病と診断される。しかし、激しい行動化も見られ、境界性人格障害と考えられる。

3) 面接経過：家族は、両親とクライアントの3人家族。クライアント幼少の頃より、父親の怪我と病気で長期入院が度重なり、母1人子1人の生活を強いられる。母親の大変さを思いやるクライアントは、早くから、母親を支える役割を取らされてきた。そして、周囲からは、聞き分けのいい、いい子ねと言われ続けてきた。そういう自己像を持っている一方、母親からはこの子は本当に悪い子だからとの評価をもらっていた。このギャップはクライアントにとって荷が重すぎた。自分をどのように評価したらいいのか、さっぱり分からず、かかわる人ごとに対応の仕方は異なっていた。

小学5年の頃に父親がやっと退院して家族3人になったが、それからというもの、親夫婦のケンカが絶えず、仲を取り持たざるを得ず、ビクビクし、顔色を伺う生活となる。不安感の高いクライアントから、以上のような家族内の対人関係を聞いて、整理するのに、数年を要した。

クライアントは、過敏性大腸炎を大学時代に発症し、それから自我同一性の拡散が起きる。母親は、クライアントが家から出て行くことを極端に恐れ、就職も地元を選ぶよう激しく迫る。やっと振り切って、就職したが、友人関係の中で、孤独感に襲われ、やむなく休職し、実家に帰ることを余儀なくされる。

家に帰ると母親は安心するが、両親のケンカは相変わらずで、気の休まるときのない生活に戻る。

30代の半ばで、伴侶を得て、結婚生活にはいるが、優しい夫の保護を受けつつも、日常の主婦業もできず、悶々としながらベッドに伏せる生活が続く。

面接では、今、ここでの話題に終始するため、家族関係の正確な把握ができず、霧の中を歩いているような、先の見えない面接となる。

クライアントと母親の関係を聞いていく中で、は

っきりしたことは、母親は統合失調症であるということだった。

クライアントは、けなされ、罵倒されてきた母親への憎しみと、病気でどうしようもなかった母親に対する思いやりを持たねばという感情の葛藤から、自傷行為、自殺未遂に走ることがしばしばであった。そういうときには、しばらくの入院も必要であった。

一進一退を繰り返しているうちに、クライアントの父親ががんで入院し、その父親の看病をしている母親が病で倒れ、数年のうちに、母親、ついで父親を亡くしてしまう。特に、母親の病気のときには、母親に対する怒りのため、面会にも、そしてついには、葬儀にも出ることができなかった。

さらに数年たち、母親に対する対応の吟味を面接の中でしているときに、以下のような夢が報告されたのである。

4) 転機となったと思われる夢「誰にも知られてはいけな夢」(およそ500回目の面接、30個目の夢)

「前の日に伯父の葬儀があり、そこで、伯母が84歳の伯父にはしてやれることはやった、もう思い残すことはないといった。その翌日に見た夢」「私は、子どもとして、すでに亡くなった両親とのかかわりの中で、自分の務めを果たしていなかったと思った。それで、恐怖と不安に襲われた。このことを誰にも知られてはいけな、もし、人に知られたら生きていけないと強く思った。」

「目が覚めて、誰にも知られてはいけなのかいろいろ考えた。そして、気がついた。自分に知られてはいけなのだ。」

夢の理解

この夢を報告するとき、クライアントは、この夢は誰にも知られてはいけな夢だと語り、しばらく沈黙があった。夢の中でもそう思い、目が覚めてからも同じことを思い続けたということである。そして、いったい誰にも知られてはいけなのだろうと考えた。絶対知られてはいけなんです、知られたら、もう私がいじめになるんですと語った。

考えて、考えて出てきた結論が、自分に知られてはいけなかつたんだと言う。繰り返すが、夢の中でもそう思い、目が覚めてからも同じように思うというところが、とても妙である。夢の性質を考えるとまったく吹き出しそうになる夢である。

クライアントの長い面接のプロセスで、最終的に残

った問題が、両親、特に、母親への許しの問題であった。病気だったのだから憎んではいけない、許さないといけないと思いつつも、それが出来なくて苦しんでいたクライアントであった。その彼女が、誰にも知られてはいけない思いというのが、両親に対する自分の務めを果たしていないという悔やみである。

母親に対して、許しよりも怒りが勝っていたクライアントは、どうしても母親が病気であったということに認めたくなかった。そこで悶々として先へ進めないでいた彼女は、この夢を通して絶対知られてはいけないと思っている自分にこそ最も知らせたいメッセージを夢でもって知らせたのである。

何と、奇妙で、しゃれた伝達の仕方ではないだろうか。この後、彼女は、時間をかけながら、親に対して負の方向を払いのけ、受け入れる道を歩んでいったのである。

## 考 察

### 1 夢の持つ意味

ここに示した夢は、数多くの夢の中から筆者が面接経過の中で、最も意味深いと思って提示した夢である。それぞれの夢は、クライアントの意識を方向付ける役割を果たしている。ひとつの夢からさまざまな解釈が可能であるが、その面接が長く継続していればいるほど、クライアントの抱えるテーマに沿った夢が登場し、ターニングポイントとしての意味を持つてくると考えられる。Aさんの夢は、あるひとつの課題を達成したことを示す夢であるし、Bさんの夢は、不登校の意味を教えてくれる夢であり、Cさんの夢は、こころの中で分裂していた、もうひとりの自分を気づかせてくれる夢であり、Dさんの夢は、やっとな親への見方が変わることを予測している夢である。

そして、どの夢も、クライアントにとっては、何らかの葛藤状況の中で、その方向性をうまく指し示してくれるものである。知りたくもあり、知りたくもなしとでもいえるようなものだし、かゆいところに手が届くようなものでもある。

一方、筆者のような、面接者の立場の者からすると、もう、クライアントには、ありがとうこんな夢を見て

くれてと言いたくなる。クライアントが面接者にプレゼントしてくれているようなものである。

筆者は、面接の中での夢の利用ということを考えるとき、どんな報告の仕方であれ、その中で語られる夢には、何らかの意味を持っていると考える。

### 2 意識と無意識と夢

心理療法の中で、クライアントの自己理解が進み、洞察を得ていくプロセスは、無意識のうちに、ある思いが徐々に形を成していき、それがより鮮明になっていくプロセスである。それは、1対1の面接の場合は、その二者関係の中で進められるとき、イメージとイメージがぶつかり合い、ことばとことばが互いに交錯し影響しあい、表情とかしぐさによる非言語的コミュニケーションが行きかい、徐々に何らかの形として形成されていく。

そういう曖昧な形の中に入り込むもののひとつが夢であろう。特に夢は、視覚化、象徴化されやすいので、クライアントにとって、自己理解を進める上ではとても便利な素材ではないだろうか。

今回報告した転機を暗示する夢は、いずれも洞察や態度の変化をきたす前に示され、時間的間隔はそれぞれ違うが、どの夢もその人の変化の方向性を指し示している夢といえる。

われわれの中に存在する無意識という意識を顕在化する手段の一つとして、夢が利用されることの重要さを筆者は考えてみた。意識化の手段としては、さまざまなものが用いられるが、その中でも夢は、自分のものという感覚もあり、利用するにはもってこいの材料ではないだろうか。

## 文 献

1. フロイト, S 1905あるヒステリー患者の分析の断片 フロイト著作集 5 1969 人文書院
2. 鐘 幹一郎 1976 夢分析入門 創元社
3. 鐘 幹一郎 1979 夢分析の実際 創元社
4. 名島潤慈 2003 臨床場面における夢の利用 誠信書房